

氏名	萩岡 由子
ヨミガナ	ハギオカ ユウコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第366号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 外国人を対象とする箏曲山田流の魅力の伝え方 ―実演と指導の両面から―

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	上條 妙子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	杉本 和寛
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		野川 美穂子
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		久本 桂子

（論文内容の要旨）

本論文では、「外国人を対象とする箏曲山田流の魅力の伝え方 ―実演と指導の両面から―」という題目にて、研究をおこなった。

第1章（箏曲指導における現状）では、江戸時代から現代に至る稽古の指導と伝授法、手ほどきの教材、外国人を対象とする稽古、また従来の箏曲における外国人向け英語教材について整理した。

ここでは、唱歌が当たり前であった稽古から楽譜の誕生をたどり、手ほどきとしての教材の使い方や楽譜の位置付け、楽譜の良し悪しを考察した。また、外国人を対象とする稽古の情報をあつめ、英語教材がまだまだ少ない現状、山田流箏曲の周知度が低い現状を確認した。その結果、山田流の魅力を発信するにあたってのポイント、これからの未来に繋げるための発信方法を考えることができた。

第2章（外国人に対する箏曲の指導や伝授の事例）では、日本における外国人への指導の事例と海外における外国人への指導の事例の二つに分けて研究した。

前者では、筆者が実際に参加した3箇所の事例をまとめた。指導する際の言葉の選び方、説明の仕方、使用する教材など、様々な方面から、指導の特徴を整理した。3箇所のうちの一例では、指導を見学するのみでなく、筆者がモデルとなって山田流の特徴を披露し、アンケート調査をおこなう機会も得たため、その分析もおこなった。

また後者では、「門弟」と「体験者」の区別を明示した上で、外国人に対する海外の指導の情報をあつめ、日本の稽古場の外国人の門弟、各流派の海外の支部、各流派から海外に派遣された門弟の指導、海外の大学の箏曲の指導、上記に入らない海外での箏曲の活動、という五つの視点に分けて、現状を整理した。その情報の多くは山田流の例であり、海外において演奏や指導を行える山田流の人は少ないことがわかった。

そもそも、箏曲に流派が二つあることさえ海外では認知されていない。これは大きな問題点であると感じた。また、海外での演奏や、外国人を対象とする演奏の場では、歌のない器乐的な曲の選曲が多く、これにも問題があると感じた。歌を伴う音楽における言葉の壁が懸念されてきたことが背景にあるのだろう。

第2章の研究を通して、外国人に山田流の魅力を伝え、山田流の認知度を高めるための努力の必要性と、山田流の特徴と魅力を自ら発信していく必要性を指摘できた。

第3章（自主企画の箏曲指導の検証）では、日本及び海外における計7箇所の自主企画の指導例とアンケート調査を整理して検証をおこなった。

ここでは、外国人のみでなく日本人も対象とし、大人だけではなく子供も対象として、視野を広げた。感じ方や感覚にどこまで違いが出るものなのかを調査した。アンケート調査に基づいて、日本人と外国人、子供と大人、リモートと対面という三つに分けて、感覚や捉え方などを比較し、それぞれのメリットとデメリット、共通点などを指摘した。

第4章（外国人に対する箏曲の伝授法）では、第3章で紹介した自主企画の検証結果と、筆者がこれまでにおこなった指導体験に基づいて、指導法を考案した。

まず、日本人（子供と大人）と外国人に対する箏曲指導、対面とリモートによる箏曲指導の二つに分けて考察した。次に、現存する日本語及び英語の教材を比較し、記載内容や説明方法などについて、良い点や難しい点を指摘した。そして、自主企画のワークショップで使用したテキストやテキストに代わるパワーポイントを参考に、初心者に向けた自作教材の作成を試みた。

最後に、その教材の位置づけや使い方を考えた。自作教材は、独学用の教材ではないこと、予習や復習にも使用してほしいが、相対した稽古の中での併用が最適であることを主張した。

これからの時代は、古くからの昔ながらの方法と、現在の世の中の風潮を取り入れた方法の両方で発信していく必要がある。その中では、日本の伝統音楽としての品位や格式を落とさないように気をつけなくてはならない。且つ、親しみの感じられない遠い存在と認識されないように気をつけなくてはならない。

これらのことを踏まえながら、外国人を含む多くの人に、山田流の音楽の魅力や特徴を伝えていきたい。それにはまず、山田流という音楽の存在を知らせること、そして、少しでも箏に興味をもってもらい、山田流の歌の魅力を理解してもらえよう、工夫していく必要がある。本研究で作成した自主教材が、そのために役立つことを期待したい。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、箏曲山田流の魅力外国人に伝える方法論を確立しようとするものである。山田流にとって重要な「歌唱」についても、言葉の壁を越えてその魅力を伝えたいとの強い思いが、研究の原動力になっている。初年度は、ハワイ大学、リヨン大学で自主企画によるワークショップを行い、アンケートを実施した。これらをつぶさに分析し、試行錯誤を重ね、指導やワークショップの精度を高めていった。2年目からは、世界的なコロナウィルスの蔓延により、予定していた海外の実践での計画の変更を余儀なくされた。国内のインターナショナルスクール、留学生などを対象に研究を続け、同時に外国人と限定せずに日本人（大人と子供）にも同様の指導を試みた。また、コロナ禍でのリモートによる指導方法など、方法論確立の為に広い視野での検討に繋げる事が出来た。これらの実践した調査を基に、英語と日本語の指導用教材を作成した事も大きな成果であった。

学位審査演奏会では「鐘ヶ岬」と「長恨歌曲」が演奏された。「鐘ヶ岬」は陰囃子の鐘の音から始まり、情緒溢れる歌唱、箏と三弦に笛をあしらい素晴らしい演奏であった。「長恨歌曲」は物語性のある格式の高い曲であるが、歌詞も明瞭で場面ごとの歌い分けが見事であった。山田流の魅力を十分に味わえる選曲であった。また、この演奏会は英語による配信、プログラムの作成が行われ、舞台には曲に関連したスライドが映し出され視覚的にも楽しめる演奏会であった。

本論文はコロナ禍のほぼ2年間を含む3年間で実践、考察が行われたが、申請者の柔軟な対応力、研究への強い思いが、ほぼ600ページの労作として結実した。

以上、総合的に判断し、学位授与に相応しい優れた研究であると認め、合格とする。